

技術職員が種をまくアントレプレナーシップ教育の挑戦

大賀 祐介

香川高等専門学校 高松キャンパス 技術教育支援室

1. はじめに

近年、学生が自ら社会課題を発見し、その解決に必要な知識・能力・態度を身につけることを目的としたアントレプレナーシップ教育の推進が求められている。令和4年度の調査によると、「アントレプレナーシップ教育に取り組む大学等は全体の約33%」¹⁾にとどまり、約7割の高等教育機関では未実施の状況にある。また、同調査では、全学生に対する受講者の割合が3.2%とさらに低く、増加傾向にはあるものの、教育の普及は依然として不十分である。

そこで、本発表では、この現状を草の根的に改善する手法として、技術職員がアントレプレナーシップ教育にいかに関与できるかを模索した取り組みについて報告する。

2. 高専機構の取組

国立高専機構では、社会課題を自分事として捉え、失敗を恐れず、新たな価値やビジョンを創造できる学生の育成を目的に、アントレプレナーシップ教育の導入を進めている。そのさらなる推進のため、令和4年度「高等専門学校スタートアップ教育環境整備事業」において、全ての国公私立の高専に対し、各校1億円の予算が配分された。この予算を活用し、試作スペースとしての起業家工房の設置や、スタートアップ教育のための講義やオンデマンド教材の整備が行われた。また、高専 DCON や高専起業家サミットなどの事業創出に結びつくコンテストを実施し、学生の活動をサポートすることにより、高専型のスタートアップエコシステムの構築を目指している。

3. 技術職員が関わることになった経緯

著者は、高専生には「自ら考え、調べ、論ずること」を身につけるためのアカデミックスキルの習得が必要であると考え、担当する実験科目において、それらの習得を目的とした実験内容の実践を行っ

ている。しかし、実験の一部として実施するのみでは効果が限定的であり、学生が継続的に学ぶ場の必要性を認識していた。

このような状況のもと、前述の予算が配分されることとなり、起業家工房の工作機器の選定を支援するため、本事業への協力が求められた。当初は機器の選定のみが予定されていたが、事業計画書の作成を進める過程で、学生向けのスタートアップセミナーの企画にも携わることとなった。

4. 実践内容

本取り組みにおいて実施した内容を以下に示す。

4.1 キャリアデザインセミナー

当時、スタートアップ活動に必要な知識を学生に教授できる人材がいなかったため、外部講師を招き、セミナーを企画した。希望する学生を対象に、起業に必要なキャリア形成やマインドセットの習得を目的とした「夢を叶えるキャリアデザイン研修」を、令和5年度の半年間にわたり5回実施した。

4.2 高専起業家サミットへの挑戦

整備事業にあわせて、国立高専機構主催のビジネスコンテスト「第1回高専起業家サミット」が開催された。これに挑戦するため、学生チームを結成し、課題および解決方法、そのビジネスモデルの作成を支援した。本チームは、本年度も活動を継続し、第2回大会においても本戦に出場した。(図1)



図1 高専起業家サミット

4.3 学生起業プロジェクト

キャリアデザインセミナーを内製化し、継続的に学生へ提供するために、本年度は「学生起業プロジェクト」を毎週1回定期的に実施した。著者が講師を担当し、課外活動として10名の学生が受講した。

アントレプレナーシップに必要な知識を学びながら、地域課題を解決する手法のビジネス化に向けた準備(図2)を進めており、成果として3月にクラウドファンディングへ挑戦する予定である。



図2 地元農家との対話会

4.4 授業支援

本年度、機械工学科2年生を対象とした「機械工学演習II」にアントレプレナーシップ教育を導入したため、授業の支援を行った。本授業では、日本の衛星測位システム「みちびき」を活用したビジネスモデルをチームで考案する内容となっており、著者は、グループワーク時のファシリテーターとして、学生の協働を支援した。

5. 自身のリスクリング

リスクリングとは、「新しい職業に就くために、あるいは、今の職業で必要とされるスキルの大幅な変化に適応するために、必要なスキルを獲得する／させること」^[2]と定義される。アントレプレナーシップ教育の発展に伴い、技術職員にもリスクリングの必要性が生じる可能性がある。

しかし、業務として実験や研究支援を主業務とする技術職員にとっては、日常業務の知識が活用可能であり、大きな障壁とはならない。これは、アントレプレナーシップとアカデミックスキルズは、対象が新規事業か研究かの目的の違いはあるが内容は共通点が多いためである。

その一方で、ビジネスについての知識はないため、事業化や実装化を進めるにあたっては、ビジネス分野の知識が不足しており、そのリスクリングが必要となる。著者は本取り組みの実施に際し、以下の方

法でリスクリングを行った。

5.1 YouTube の活用

リスクリングに充てられる時間が限られるため、すでに要点が整理されたYouTubeの動画は有効な学習手段となる。また、ビジネス関連のチャンネルも多く、自身に適したものを選択可能である。著者も基本的な内容の学習にあたり、YouTubeの動画を活用した。

5.2 自治体・商工会主催のセミナーへの参加

近年、人口減少に対応するため、地域におけるビジネスの創出や経済の活性化を図ることを目的に、自治体が起業支援に注力している。これに伴い、起業に関する知識や新規事業の推進、革新的テクノロジーについて学ぶ機会が提供されている。著者も、香川県が整備するSetouchi-i-Base主催の「Webマーケティング」および「生成AI」に関するセミナーを本年度受講し、リスクリングに活用した。これらのものは、無料で受講できるものも多く、金銭的な負担もなくリスクリングを進めることができる。

6. 学生の評価

学生支援プロジェクトの参加学生に対し成果アンケートを実施した結果、満足度は4.6/5.0と高評価を得た。また、「学びが多くてとても充実していた」「このプロジェクトに参加していなければ得られなかった知識を習得できたことが1番良かった。」との意見が寄せられ、本取り組みの意義が確認された。

7. まとめ

アントレプレナーシップ教育への取り組みを通じて、技術職員としての業務領域を拡大できただけでなく、リスクリングの実践も経験することができた。本発表を通じ、アントレプレナーシップ教育に関心を持つ仲間が増え、さらなる発展につながることを期待する。

参考文献

- [1] 文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域振興課 . 令和4年度 全国アントレプレナーシップ醸成促進に向けた 調査分析等業務報告書 . 2023
- [2] 経済産業省 第2回 デジタル時代の人材政策に関する検討会 リスクリングとは—DX時代の人材戦略と世界の潮流— 2021